特集 私なりの里海論・里海感・里海的取組

里海と魚つき林

若 菜 博

室蘭工業大学

Satoumi and Uotsukirin (Fish-breeding Forests)

HIROSHI WAKANA

Muroran Institute of Technology, Muroran, Hokkaido 050-8585, Japan

1. 里海と日本の魚つき林の歴史

里海とは、「魚族・水族の生産性および多様性が地域の人手によって持続的に確保される海域」と考える。ここで「持続的」という語を付け加えるのには理由がある。イワシ・サバ・サンマなどの「魚種交替」をみるまでもなく、魚の資源量は常に変動しており、広域的に見ても「恒常的」な漁獲を期待できない場合もある。だからこそ江戸時代の魚つき林は「持続的」なイワシ漁獲を目指して造成・保護されたものが多かった。

さて、里海は1998年に提唱された言葉であるが、それと同根の理念を持つのが魚つき林である。魚つき林は日本列島において千年以上の歴史をもつ。魚つき林に関する記録は、947～956年頃（天暦年間）、「阿波國板野郡里浦・松茂等の海岸諸村に於て、風潮除を兼て魚附の用に供する目的を以て〔黒松林を〕仕立てたりと言ひ傳ふる」（遠藤安太郎『日本山林史保護林篇（上）』（1934）, p. 870）のが初見とされる。¹⁾ なお、「阿波國板野郡里浦・松茂等の海岸諸村」は現在の徳島県鳴門市および松茂町であり、徳島空港近辺の地域である。空港隣接の海岸林は、今は潮害防備保安林に指定されている。

また、11～12世紀頃の瀬戸内海を中心とした「海上交通の担い手」についての網野善彦（1994）の記述には「魚付」が現れる：『「櫓・棹・杵の通い路は当社供祭所たるべし』『西国の櫓・棹の通い地（ママ）は、みなもって神領たるべし』という絶大な特権を与えられ、『魚付の要所をト（ぼく）して居住』した両社〔賀茂社および鳴社〕供祭人が（『鴨脚秀文文書』），こうして瀬戸内海を縦横に活動し、漁撈だけでなく廻船人としても重要な役割を果たしたことは確実で、御厨・所領の分布をみると、その活動範囲は琵琶湖を通して北陸、また、瀬戸内海から山陰にまでおよんでいたと思われる」（pp. 178-179, 下線および〔 〕は引用者による）。²⁾

里海が提唱されてきたのは瀬戸内海を中心とする海域

が始めであったと理解しているが、魚つき林の最古の記録が見られる海域も瀬戸内海であることは偶然だろうか。

ちなみに、日本での山林保護は718年養老律令での「山川藪沢（山林原野）の恩恵は公私共にせよ」という記述や、821年の太政官符による水源地での樹木伐採の規制令「浸潤のもと、水木相生ず。然らば則ち水辺の山林は必ず須らく鬱茂せしむべし」があり、これは世界最古の「保安林」立法と言われる。³⁾

さて、遠藤安太郎（1934）は、魚つき林について以下のように要約している。¹⁾「要するに、帝國の地形は、海岸線の延長七千五百里に亘り、三拾里以上舟筏を通じ得る河川四拾九、周圍四里以上の湖沼四拾二に及び、最も魚族の蕃殖に適し、國民は之を食糧とし肥料として生活上缺く可らざるものなりしを以て、建國以来漁撈自然に発達し、延て森林と魚族との關係は夙に認識せられ、魚附林の如き既に上代に於て、海岸は勿論河川湖沼等の漁獵場付近に保存又は新設せられたるもの多かりしが如し。而して概して前代人は、魚附林上森林の効果を森林の陰翳に在りとしたるものゝ如く、樹種は海岸に在りては、海上に黒みを興ふる黒松・ヤマモモ・ウバメガシ等を以てせり、唯河川等に於る場合は、雑木林を主とせり傾向あり。蓋し陰翳以外に理水・食餌等の効果關係を認めたるによるものなきにあらざりしが如しと雖、畢竟〔ひっきょう〕是れ近代の思想によるものにして、彼の岐阜縣下掛斐川上流の荒廢を復舊して、鮎の繁殖を圖れるが如きは其一例なり」（pp. 874-875）。上記の記述にあるように、「建國以来」、日本列島の各地「漁獵場」（＝里海）の多くに魚つき林が保存・造成されていた。

2. 大分県姫島

大分県国東半島先端の姫島では、明治初期に島の山（矢筈岳、標高267 m）が濫伐のため禿げ山になり、漁業も不振に陥った。そこで、1881（明治14）年頃から

島の有力者・中條石太郎（1847-1900）が植樹・取り締まりを行い、1907（明治40）年頃に緑が復活し、漁獲が増大したとの記録が、農商務省水産局が編集発行した『日本の魚附林～漁業ト森林トノ関係』（1911）にある。⁴⁾ 中條は姫島の初代郵便局長、村の助役・議員などを歴任した人物であった。『姫島史全』（1921（大正10）年発行、謄写版印刷）は以下のように中條の業績を賞賛している。⁵⁾

「〔一〕百難を排して魚附林を設定す

凡ての魚族は、山頭丘阜の樹木蔭鬱たる蔭影に向って集るを性とする。されど島民此理を解せず、且つ島中新材に乏しく、燃料に不自由なるが為め、山野の樹木は成長に至らしめず、悉く之れを採伐するを常習とす。殊に共有山野の如きは最も甚だし。是を以て唯一の高山、箭筈嶽の如きも、伐採のはげしき為め、殆んど赭たらんとするの有様とはなれり。君之れを覩て深く憂い、斯くては如何に魚類に富める本島とて、魚族は年々何れへか逃亡し遂には不漁の悲境に陥り、島民忽ち活路を失うの時たらんも知る可らずと、明治十五年の頃より、東馳西奔之れが禁伐を奨励し或は登山して説諭を加ふ、肯（キ）かざる者は其所持したる刃器（ハモノ）を没収し、或いは警官の諭示を請ふ等、百方力を盡したるも、頑固の漁民等馬耳東風に附し去り、尚ほ間を窺ふて採伐を止（ヤ）めず。君代に苦慮し、明治二十四年に至り、自ら請ふて同年より向ふ三十ヶ年間保管の約を結び、私費を以て樵夫一人を常番に雇入れ、嚴重之れを監視せしめたり。是より村民復た山に入るの間を得ず。且つ君の熱心漸く一般に貫徹し、相傳えて先非を悔悟し、自から繁殖を後れしめしを憾むるに至ると言ふ。今や本島の山林、往く所として蔭鬱たらざるはなく、其結果として魚族の群集最時に倍蓰するを得たるは、全く君が熱誠の賜と謂ふべし」（82～83頁）。姫島での明治・大正期の魚つき林の効果についての認識状況や島民の意識の変化などもよくわかる記述である。

現在、姫島の魚つき林は保安林として指定されていないが、姫島村役場が魚つき林（地元では「魚つけ林」と呼ぶ）の保全活動に取り組んでいる。また、姫島の明治以降の歴史で特記すべき事として、「漁業期節」（漁期や漁法を制限する漁民たちの自主的申し合わせ）がある。『姫島村史』（1986）に「姫島で漁業期節が定められたのは明治19年といわれている。もっとも、それ以前に、申合せで漁業期節が定められていたようだが、はっきり公式に定められたのは、漁業組合が設立した明治19年である。当時の内容ははっきりしないが、明治37年の漁業期節が記録に残っている」とある。⁶⁾ 1886（明治19）年以降、短い中断期間はあったものの、およそ、現在までの百年以上にわたり、乱獲によって魚族が減少することのないよう、漁民たちの自主規制が設定され

（他の漁協から見れば相当厳しい規制である）、かつ、それが基本的に守られ続けている。姫島村漁業組合は、戦後の水産業団体法一部改正により1949年に姫島村漁業協同組合となり、2003年に大分県漁業協同組合姫島支店となった。大分県漁業協同組合姫島支店は「伝統的漁獲規制等による資源管理」をテーマに「里海」運動に参加している。姫島では魚つき林と里海は一体のものとして認識されている。

3. 巨大魚つき林と巨大里海

以上で触れてきた魚つき林（海岸や河川湖沼の沿岸の林の一部）とはスケールが違うが、2006年に白岩孝行らによってアムール川（黒竜江）流域がオホーツク海と親潮域の「巨大な魚附林をなしている」ことが提起され、アムール川流域とオホーツク海・親潮域という総面積にして1,000万km²におよぶ壮大な「巨大魚附林システム」が存在することが実証されたという。⁷⁾

犬飼哲夫（1951）はかつて「従来魚附林として保存されていた海岸の森林は勿論一部は魚附の意義を有するが、それより寧ろ広く沿岸水域を支配する河川の水を調節し水族を保護するものは内陸奥深く存在する山林の方が重要で、わが国の山林全部が魚附林である」と主張した。⁸⁾ 全国各地の漁業関係者が内陸での植樹活動に目を向けているのは犬飼の上記の主張が背景にある。水・土砂などの調節機能や海と陸との物質循環の視点から見れば、犬飼や白岩らの提起は重要であり、同時に先人の知恵の結晶でもある「魚つき林」という環境システム概念を継承しかつ拡大しているとみることができる。

オホーツク海と親潮域は言うまでもなく世界有数の漁場であり、北海道民にとっては里海（「巨大魚附林」に对比させて言えば「巨大里海」）とも言えるものである。

4. 海岸林・里海と地域の持続可能性

日本列島においては「防潮林（潮害防備林）」は西暦650年頃から、「砂防林（飛砂防止林）」は同704年頃から、「魚つき林」は同947年頃から発生していると想定されている。現行森林法での保安林は17種であるが、海岸に多く指定されているのは、土砂流出防止・土砂崩壊防備・飛砂防備・潮害防備・防風・防霧・魚つき・航行目標・保健・風致等の保安林である。また、保安林名称ではないが、「砂防林」と称される保護林は全国の海岸地帯で維持されている。森林の機能は、もとより複合的でその名称のみに限定されない。海岸砂防林は潮害防備・防風・防雪・魚つき等の機能を併有するとともに土砂流出防止・土砂崩壊防備の機能も併用されていることも多い。また、潮害防備林は潮風の害を防止することを目的として造成されたものが大半だが、同時に津波被害への備え、魚つきとしての効用などが期待されている例

が多い。韓国でも慶尚南道南海郡勿巾港(ムルゴンハン)に「防潮魚つき林」が約 300 年前からあると言われ、「防潮」「魚つき」の機能が認知されている。

日本列島における海岸保護林および保安林の保全・造成の営みは、環境育成やその保全とともに防災機能に関する千年単位の知恵が結実したものである。それは、命を守るための防災効果(防潮林等)と同時に、その場所で生活を営み続けること(砂防林, 防風林, 防雪林, 魚つき林等)を追求する営為でもあった。「魚族・水族の生産性および多様性が地域の人手によって持続的に確保される」里海も、地域の持続可能性が担保されるための概念である。

文 献

- 1) 遠藤安太郎. 「日本山林史保護林篇(上)」日本山林史刊行会, 東京. 1934.
- 2) 網野善彦. 「日本社会再考—海民と列島文化」小学館, 東京. 1994.
- 3) Totman C. *The Green Archipelago, Forestry in Pre-Industrial Japan*, University of California Press. 1989 (コンラッド・タットマン著/熊崎実訳「日本人はどのように森をつくってきたのか」築地書館, 東京. 1998).
- 4) 農商務省水産局編集. 「日本の魚附林—漁業と森林との関係」農商務省水産局, 東京. 1911(信山社, 1998 年復刻).
- 5) 鶴谷・佐藤蔵太郎. 「姫島史全」大分県姫島村. 1921. (謄写版印刷)
- 6) 姫島村史編纂委員会編. 「姫島村史」姫島村史編纂委員会, 大分県姫島村. 1986.
- 7) 白岩孝行. 「魚附林の地球環境学—親潮・オホーツク海を育むアムール川」昭和堂, 京都. 2011.
- 8) 犬飼哲夫. 森林と水産業「樹氷1951 年 11 月号」帯広営林局, 北海道. 1951.
- 1) 遠藤安太郎. 「日本山林史保護林篇(上)」日本山林史刊行